

1 朝日観音霊験

伝承地：本町9-18（光明寺）

参考書籍：1・6～8・17



（光明寺観音堂）

宇都宮5代城主頼綱は、武士の生活を捨て法然に帰依して実信房蓮生と名のり和歌を友としながら仏の道に精進した。

建保3年（1215）、京都から宇都宮に帰った蓮生は、蓬萊町に閑居するとお堂を建て観音像を安置したという。

この観音像は、「蓬萊観音」とも呼ばれたがいつしか「朝日観音」とも呼ばれるようになり、宇都宮景綱が東勝寺を建立すると本尊になったといわれている。

しかし、東勝寺が廃寺になってしまい観音像は光明寺（本町）に移され現在に及んでいると伝えられている。この「朝日観音」には、霊験あらたかな物語が数多く伝わっているが、ここでは四つのお話を紹介する。

1. 天授6年（1380）、宇都宮11代城主基綱は、茂原の地において小山義政の軍と戦い戦死し、その部将上三川城主今泉但馬守は小山勢に捕えられ、顔だけ残して地中に埋められ、さらに髻を固く木の太枝に結びつけられ逃げられないようにされました。

ところが但馬守は日頃から朝日観音を崇敬していたので、一睡もせず仏の加護を祈りました。すると、夜半に但馬守を激励する声が力強く風の音を押し分けるように響いてきました。すると不思議なことに、身体は地中から抜け出し、木の枝に結びつけられた髻は解けていました。そして無事に逃げることができました。

2. 江戸時代のなかごろ、馬場町の乾いてしまった鏡ヶ池のほとりに、貧しいけれどもとても仲の良い夫婦が住んでいました。この夫婦は、毎朝朝日観音にお参りをすることを日課としていました。

長い間、子どものなかった夫婦に、朝日観音の霊験により男の子が授かりました。しかし、出産後、間もなく妻が病気で亡くなってしまったので、子供の父の悲しみは深く、近所の人たちも声もかけられないようなありさまでした。しかし、信仰心のあつい父親は、朝に夕に、朝日観音に子供が無事に大きく育つようにと祈りました。

空腹どきになると、乳を求めて泣くので、近所で半年前に出産をした人の乳をもらうことになりました。しかし、夜半に、母のぬくもりの恋しさのためか空腹のためかはげしく泣くので、止

むなく自分の乳をふくませたところ、不思議にも母親の乳のようになり、子供の空腹を満たすことができました。そして、無事に心のやさしい元気な子どもに育てることができました。

3. 朝日観音を深く信仰していた道場宿の新吉は、朝日観音の縁日の帰り、ほろ酔い気分で鬼怒川のほとりまでやって来ました。すると突然、草むらに隠れていた賊が、新吉めがけて、剣を抜いて襲いかかってきました。あわてた新吉は、ほろ酔い気分もふき飛んでしまって、川沿いにある船着き場まで夢中で逃げたけれども、どうしたわけか、その日に限って船がありません。追いつめられた新吉は、ただただ一心に朝日観音に祈り川に飛び込みました。

すると、不思議なことに、水中に一度沈んだ身体は、浮き、川の上に立つことができました。そして地面の上を走ると同じように、鬼怒川の川面を走って、向う岸まで渡ることができました。賊もこの不思議な光景には、ただぼう然とするだけでした。

4. 安永2年、西原組屋敷から出火し、宇都宮41町が全焼するほどの大火の時、朝日観音を信仰していた大工の平助は、火に追われて、命からがらやっとの思いで観音堂の前まで逃げてきました。しかし、火の勢いは増々激しくなり、お堂のまわりは、真赤な火の粉が舞い踊り、建物のくずれる音は、雷のようでした。

死を覚悟した平助は、地面に顔をつけ、身を小さくして、観世音の名を繰り返し、繰り返して唱えました。

すると、不思議なことに、突然、お堂と平助のまわりの火の勢いは、波が引くように、遠のいていき、助かることができました。



2 あざ 地 蔵

伝承地：徳次郎町

参考書籍：33



(痣地藏)

徳次郎町中町の日光街道沿いに、痣地藏堂と呼ばれているお堂がある。ここは、むかし、神宮寺といわれ、このお堂の中に、痣地藏が安置されている。

お地藏さんにまつわる話しは数多いが、この痣地藏は、あざやいぼで困っている者が願をかけるとすぐなおるとされているものである。

この地藏は、変った姿の地藏で、近隣の村はもとより、遠く茨城県のあたりからもおとずれたという。

比沙門山の西側の開懸の際に地中から発見され、智賀都神社に安置された後、現在地に移されたといわれている。

